

サイ・テク 知と技の発信

【624】

埼玉大学・理工学研究の現場

研究はエンターテインメントになり得るのだろうか。そう問いかけると、違和感を覚える人も多いだろう。研究とは成果を生み出す営みであり、論文という完成品が評価される世界である。一方、エンターテインメントは人を楽しませるもの。一見すると、両者は対極にあるように思える。しかし、研究の現場に身を置いていると、そんな単純な話ではないと感じる。私は2023年、研究室の立ち上げと同時にユーチューブチャンネル「ふるかわ研の控え室」を開

設した。世の中の化学系動画の多くは、教育や知識の普及を目的とし、視聴者が短時間で理解できるように丁寧に編集されている。それに対し、私たちの動画は失敗も雑談もそのまま残す。新しい分子の合成に挑戦し、思うように進まず頭を抱え、学生と議論し、ようやく次の一手を見つける。その過程をできるだけカットせず記録している。情報として見れば、決して効率の良いものではない。知りたい実験操作だけを探す人にとっては、むしろ不親切な動画だろう。それでも、

研究はエンタメになるか

古川 俊輔 助教



ふるかわ・しゅんすけ 1982年生。東京大学大学院理学系研究科博士課程修了。博士(理学)。東京大学大学院特任助教を経て2014年8月から現職。立教大学理学研究科客員准教授。専門は有機化学を利用したものの研究。

研究という営みの本質は、論文に書かれる成功の数ページではなく、その裏側にある膨大な試行錯誤にある。

近年、人工知能(AI)は論文を読み、実験条件を提案し、材料探索を支援するまでになった。研究はこれからはますます効率化され、研究テーマとその実現可能性はAIが決め、何をやるかの判断だけが人間に残される。その流れ自体を否定するつもりはない。むしろ、研究者はその恩恵を積極的に活用すべきだと思う。一方で、効率化されるほど、そこからほ

れ落ちるものもある。誰がどんな発想から研究を始め、何度失敗し、どんな議論を経て前へ進んだのか。そうした人間の営みは、論文にも実験データにも十分には残らない。私は、その「こぼれ落ちるもの」を残してみたいと思った。

もちろん、その代償は小さくない。動画編集には多くの時間を要し、論文執筆や研究に充てられる時間は減る。何だかんだ論文業績が重要な教員評価システムでの出世とは縁遠くなる。研究内容の公開には知的財産や新規性への配慮も欠かせず、大学教員として決し

て合理的な活動とはいえない。

それでも続ける理由がある。AIが知識を整理し、実験を支援する時代だからこそ、人が未知に向き合い、迷い、議論し、少しずつ前へ進む姿そのものに価値が生まれるのではないだろうか。大学もまた、知識を教えるだけの場所から、「誰と、どのように知を生み出すか」を体現する場へと変わっていくだろう。

研究はエンターテインメントになるのだろうか。私にもまだ答えは分からない。ただ一つ言えるのは、人が本気で何かに挑み、失敗を重ね、それでも前へ進むところから、人を引きつける力があるということだ。もし研究にもそんな力があるのなら、その過程を社会に開いていくことも、AI時代の研究者が担える新しい役割の一つなのかもしれない。